

「鋭敏な美感覚」を育てる「小学校音楽科学習指導案」の作成法：「オリジナルナック」の開発と「視聴価ブランド」の構築を中心に

著者	田畑 八郎
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	4
ページ	107-118
発行年	2018-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1677/00000154/



「鋭敏な美感覚」を育てる「小学校音楽科学習指導案」の作成法 —「オリジナルナック」の開発と「視聴価ブランド」の構築を中心に—

The Creation method of "Elementary school music study guidance" to bring up "Keen sense of beauty"
-Focusing on the development of "Original knack" and "Brands worth watching"

田 畑 八 郎*
TABATA Hachiro

要 旨

この研究は、小学校現場で「鋭敏な美感覚」を育てる音楽の授業を展開するには、どのような学習指導案を作成したらよいのか、その方法論を考察したものである。研究のきっかけは、平素の学習指導案の書き方が、ただ授業の流れを順序立てて書かれてしまっている現実があるということである。そもそも、学習指導案の「学習活動」の欄は、活動の内容を羅列すれば良いものではない。この欄には、①子どもたちがどのような学習態度で取り組んで欲しいのか、また、②子どもたちに考える場をどのような形で与えるのか、そして、③その結果がどうであったかをどのような方法で評価させるのか、この3点が書かれているかを確認しながら学習指導案を作成すべきと考える。さらに、「教師の働きかけ」の欄には、ただ「歌わせる」とか「感じ取らせる」という働きかけではなく、どうしたら「鋭敏な美感覚」を育てる音楽の授業を展開することができるのか、そのための必要な技能についても指示する内容を記述すべきと考える。

そこで本研究では、まず、「鋭敏な美感覚」を育てるために、「オリジナルナック」（独創的指導技術）の開発と「視聴価ブランド」を構築することを考えた。この二つの方法は、新学習指導要領（小学校音楽科）の目標に示された「表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする」に基づいて、研究主題の目標を達成する「目的」として筆者が独自に考案したものである。そして、この「オリジナルナック」と「視聴価ブランド」の二つの方法がなぜ「鋭敏な美感覚」を育てることにつながるのか、その理由と効果を探ることにした。

研究の結果、「鋭敏な美感覚」を育てるためには、指導者自身がもつ感性で、他者が真似することができない「オリジナルナック」の開発と、自ら見たり聴いたり表現したことが、他者とは異なる価値を呈する「視聴価ブランド」を構築する手法が有益であることが明らかになった。そして、これらの手法を生かして学習指導案を作成すると、個性や意外性を追求した「鋭敏な美感覚」を育てる教育に直結することが見えてきた。その具体例は「オリジナルナックの具体例とその検証事例（表1）」や「視聴価ブランドを構築するロードマップ（表2）」として提示している。

Abstract

This study examined the methodology of what kind of a learning guidance plan should be prepared in order to develop a music lesson that nurtures a "Keen aesthetic sense" at elementary schools. There is an opportunity for the research to develop a simple teaching instruction plan, written only in order of the flow of classes. In the first place, the "learning activity" column of the learning guidance plan should not list the contents of the activity. In this column, we will examine 1) what kind of learning attitudes children want to work on, 2) how to give children the opportunity to think 3) what the results were. I think that we should prepare a teaching instruction plan to confirm whether these three points are achieved or not by the method. Furthermore, in the column of "Teacher's encouragement" is not just the "singing" or "letting you feel" approach, but how can you develop a music lesson that fosters "Keen sense of beauty"? We should describe the content that instructs necessary skills.

In this study, first of all the development of "Original knack" (Creative teaching technology) and "Brands worth watching" was thought to be developed in order to develop a "Keen sense of beauty". These two methods are based on the goal of the new course of study (Elementary school music) to acquire the necessary skills to express the music that you want to represent. The author conceived the "Purpose" to achieve the target and, the reason and the effect are investigated why the two methods of this "Original knack" and "Brands worth watching" lead to the raising of a "Keen sense of beauty".

*大和大学教育学部教育学科（初等幼児教育専攻）

平成29年12月12日受理

As a result of the research, in order to develop a "Keen sense of beauty", with the sensitivity of the teachers themselves, the development of "Original knack" that others cannot imitate, and the ability to see and listen and express their own values are different from those of others. It became clear that the method of building a "Brands worth watching" was useful. And when we make use of these techniques, we can see that it is directly linked to the education that fosters a "Keen sense of beauty", which pursues individual and unexpected surprises. A specific example of this is presented as a "Concrete example of "Original knack and its verification (table 1)" and "Roadmap (table 2) to build a Brands worth watching".

キーワード：鋭敏な美感覚，学習指導案，オリジナルナック，視聴価ブランド，新学習指導要領

keywords：Keen sense of beauty, Study guidance, Original knack, Brands worth watching, New course of study

I. はじめに

これまで筆者は，小学校音楽科の指導法については様々な方法を提案してきた。その中で，小学校にふさわしい学習指導案とは何かについて真剣に考えるようになった。それは，授業の流れを順序立てて書かれているより，「指導場面と評価方法が一体化した学習指導案の作成法」である。この課題を明らかにしたいと思った動機は，学習指導要領の改訂と中央教育審議会の答申である。

2017年3月31日に告示された新学習指導要領の小学校音楽科の主な改訂のポイントは，「音楽の授業を通して身に付ける資質・能力についてその目的と方法を明記した」ことと，「音楽を学ぶ本質的な意義を明確化した」ことの2点であろう。従来(現行)の目標は，「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」，「音楽活動の基礎的な能力を培う」，「豊かな情操を養う」という抽象的な目的が示されてきたが，今回の改訂では，行動を進めるにあたって，実現・達成を目指す具体的な方法(目標)を求めているのである。これを踏まえて，音楽をなぜ学ぶのかという本質的な意義を明確化することも合わせて求めている。

もし，「目的」を「最終的に到達しようとして目指すもの」と定義付けるならば，「目標」は，「さしあたって成し遂げようとして目指すもの」と言える。両者は，目指すという意味では同じであるが，目的は抽象的なものを，目標は具体的なものをねらっている。今回の改訂で示されたものは，従来の目標が抽象的な「目的」に近い記述になっていたものが，到達しようとして目指すものをより明確にして，本来の「目標」として具体的に示せたのではないかと実感する。「目的のために目標を達成する」と考えるとき，音楽科の目標を実現するために，具体的な「方法」まで踏み込んで，資質・能力を身に付けることを求めたことの理由が理解できる。

本研究で求めた「鋭敏な美感覚」と「学習指導案の作成」は目的，「オリジナルナック」と「視聴価ブランド」は目標にあたる。つまり，本研究は，鋭敏な美感覚を育てるために「オリジナルナック」と「視聴価ブランド」

という手法を使う。そして，目的を達成するために，実現可能な目標を立て，そのプロセスを最終的に使える形として「学習指導案」を作成する，という流れになる。

二つ目の動機は，平成27年12月に出された中央教育審議会の答申「これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上について」である。この中では，これからの教員は，「情報を適切に収集し，選択し，活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である」と書かれている。(注1)

研究の動機として挙げたこれら二つ例文には，具体的な指導方法と活用力を明示しているため，「指導内容と評価方法が一体化した学習指導案」を求めているものと考えている。

II. 研究の目的・目標

本研究の直接的な目的は，「鋭敏な美感覚」を育てる「学習指導案」の作成法である。そのための目標として，「オリジナルナック」の開発と「視聴価ブランド」の構築を掲げている。本研究では，目的は「到達しようとして最終的に目指すもの」，目標は「さしあたって実現しようとして目指すもの」として使い分けている。それゆえ，本研究の主題が目的，副主題が目標という構図になっている。これらの考え方を受けて，目的を実現するための具体的な目標を箇条的に示せば次の2項目になる。

1. ワトソンとレイナーが主張する「刺激のペア理論」を援用して，「オリジナルナック(独創的指導技術)」が「美感覚」の育成に有効であることを明らかにする。
2. 「他者とは異なる価値を呈したときの象徴内容」を「視聴価ブランド」として命名した場合，この評価法としてのブランドをどのように導入したら「鋭敏な美感覚」を育成することに直結するのか，これを明らかにする。

III. 研究の方法と手順

本研究の方法と手順は以下のとおりである。

1. 「鋭敏な美感覚を育てる方法」の専門的内容については，文献による理論研究と論文等を基にした実証的研究

2. 「オリジナルナックの開発」については、著書や学会発表、論文、授業を通じた実践的研究
3. 「視聴価ブランドの構築」については、著者の授業「くらしと芸術」や「教科教育法」、「卒業研究」の中で、他者とは異なるブランド力を培うための授業実践とレクチャー、レポートの提出など。

本研究においては、これらの研究方法のほかに、学内のオープンキャンパスや文化行事、地域連携を目的とした野外コンサート等に積極的に参加するなどして、この中から得た実践と検証も取り入れながら、文末の結論を得た。

IV. 研究の内容

1. 「鋭敏な美感覚」を育てるとは

一般的には優れた音楽作品を吸収・提示できれば鋭敏な美感覚を育てることができる、とされている。しかし、音楽体験において「美」と感じることができるのは、主に「音相互の連関の美」であり、「音の形作る構成美」である。例えば一つの和音の美は、それを構成するそれぞれの音の高さの性格によって生み出される。しかし、一つの和音だけでは和音の美としては時間的関連の中にあるのではないので、美を生む知覚条件を備えていない。いくつかの音の関連によって創り出され、美的性格を整えた音のみが鋭敏な美感覚を生むのである。美学的に言えば、「その和音が美しいから心地よく聞こえるのではなくて、心地よいがゆえに美しい」のである。

音による感覚美を語るとき大切なことは、いかなる単純な感覚美も、その根底に統覚作用が働くということである。音楽における統覚作用は、歌う、奏でる、創る、聴くなどの活動や、視覚、聴覚、触覚などの様々な感覚経験を総合し統一する作用として機能している。私たちは一つの感覚で音楽を認識するのではなく、五感をフルに働かせて全体を認識している。だとすると、その五感で感覚されたデータや、その物体を「核」にして取りまとめ、総合しているものがなければならない。その働きが「統合作用」である。

この研究で求める「鋭敏な美感覚」とは、単に単音の美感覚の追求ではなく、理解、判断、感覚が素早く統合した鋭い美感覚である。つまり、時間的関連の中にあつて、美を生む知覚条件を備えた美感覚である。この目的を達成するために、次に述べる「オリジナルナック」の開発と「視聴価ブランド」の構築を目標として掲げた。

2. オリジナルナックとは

オリジナルナック (Original knack) という用語は、筆者の造語である。もともと「オリジナル」には、「独創的な」や「創意に富む」、「新鮮な」等の意味があり、「ナック」には、「巧みな技」や「こつ」、「技術」等の意味がある。これらの意味を念頭に置いて、指導者自身もつ感性で、他者が真似することができない「独創的指導技術」のことを「オリジナルナック」と名づけた。

なぜオリジナルナックが必要なのか。教育現場における教科指導は、並の指導では子どもたちが興味をもって教師の指導法に関心をもってくれない。そこで、創意に富んだ独創的な指導技術を使って、子どもたちの意欲的な活動を何とか引き出す方法はないものかを考えた。その一つが音楽の授業で音域の広い歌を歌ったり、合唱の各パートの音色を揃えたいとき、表声と裏声を織り交ぜて「喚声区」を無くする「ボイスミックス唱法」というオリジナルナックであった。この手法は、「擬声(態)発声」を使って地声的な胸声と、ファルセット的な頭声の境界線が分からないように訓練するのである。この唱法は、機転の力による一種の教育的タクト、つまりオリジナルナックであり、巧みに使えば短時間で、声の響きと合唱時のパートの音色が揃うという高い教育効果が得られる。オリジナルナックのメカニズムを理解し、これが有効であることを検証するには、ワトソンとレイナーが主張する「刺激のペア理論」がある(注2)。この理論は、音楽が情動を喚起するためには、そのきっかけとなる動機付けが必要であるとして、進行中の行動に別の強化因子を加えると、その行動が強められるという考え方である。これは、ある反応が起こると、それとは別の強

表1 オリジナルナックの具体例とその検証事例(注3)

鋭敏な美感覚を育てる音楽の要素	修正を必要とする箇所	オリジナルナックの具体例	結果の検証
(1) 音程の正確性 [音程]	<input type="checkbox"/> 歌おうという気持ちや歌おうとする緊張感が弱いと、音程が下がり気味である。 <input type="checkbox"/> 高音やアクセントの付いた音の音程はずれやすく不正確である。 <input type="checkbox"/> 高音の声が出にくく、いつも音程が低めにぶら下がっている。	ア. 対面唱法 イ. アタック唱法 ウ. 移調唱法	<input type="checkbox"/> 互いに向かい合って歌うことで緊張感が高まり、口の開け方や表情が引き締まり、音程のぶら下がりを防止できた。 <input type="checkbox"/> 声をアタック気味に瞬時に出すことで特に高い音が正確に出せるようになった。 <input type="checkbox"/> 原調より高い調で歌った後、再び原調に戻れば、高音が楽に歌えるうえ、全体的に正しい音程で歌えるようになった。

(2) 音色の融合度 [音色]	<input type="checkbox"/> 個人、又は数名の固い声が飛び出して聞こえる。 <input type="checkbox"/> 個人、又は数名の声が揺れて他者と音色が溶け合わない。 <input type="checkbox"/> 全体的に暗い発声のため、音色が暗く、濁って聞こえる。	エ. ボイスマックス唱法 オ. ノンビブラート唱法 カ. ほほえみ唱法	<input type="checkbox"/> 裏声と表声の声の変わり目（喚声区）をなくしたら低音と高音の境目が目立たなくなり、音色が揃うようになった。 <input type="checkbox"/> 声の揺れ(ビブラート)をなくし他者の声を聴きながら歌ったら、音色が溶け合うことを確認できた。 <input type="checkbox"/> ほおを上げ歯を見せるような表情で歌うと、発声が明るくなり音色が揃うようになった。
(3) 和音の協和度 [音の重なり]	<input type="checkbox"/> 長三和音で構成される3度の和音の響きがなかなか協和しない。 <input type="checkbox"/> 高音のピッチが常にぶら下がり気味で和音の響きが不安定である。 <input type="checkbox"/> 他のパートの音を聴いて歌っていないため縦の和音の響きが揃わない。	キ. 純正3度唱法 ク. 背伸び唱法 ケ. バス音唱法	<input type="checkbox"/> 属和音を除く主和音や下属和音の第3音を、平均律のピアノより低めに歌うと和音がきれいに響くことが分かった。 <input type="checkbox"/> 高音を歌うとき、その部分で背伸びして歌うと、音が支えられて音程の下がりを防止できた。 <input type="checkbox"/> ピアノで弾く和音の根音を聴きながら歌うと、他のパートと一緒に響く縦の和音を聴き取ることができた。
(4) リズムの周期性 [リズム]	<input type="checkbox"/> 拍子を感じて歌わないため、各フレーズの歌い出しが揃わない。 <input type="checkbox"/> 徐々に歌うテンポが速くなって、全体的にリズムに乗れない歌い方をしている。 <input type="checkbox"/> ポピュラー音楽のアフタービートのリズムがとれずに曲想が平坦な表現になっている。	コ. ハンドクラッピング唱法 サ. 裏拍感得唱法 シ. 弱拍アクセント唱法	<input type="checkbox"/> 曲に合うリズムを両手で打ちながら歌うと、各フレーズの出だしが揃い、拍子も合うようになった。 <input type="checkbox"/> メトロノームに合わせて裏拍を打つ練習を重ねてから歌うと、テンポが安定してリズムに乗れるようになった。 <input type="checkbox"/> 弱拍にアクセントを付けて、アフタービートを強調しながら歌うと、リズムの安定した曲想表現ができるようになった。
(5) 声の響きの強度 [声の響き]	<input type="checkbox"/> 歌っている声の響きが弱いため、歌詞の不鮮明さや音色の不揃いが目立つ。 <input type="checkbox"/> fやアクセントなど、瞬時に必要な声の響きが弱いため、曲想表現に支障を来している。 <input type="checkbox"/> 鼻腔共鳴が不足しているため、声の固さが目立つ。	ス. ペーパーリップ唱法 セ. 擬声(態)発声唱法 ソ. ミンミン唱法	<input type="checkbox"/> 身近にある紙に唇を当て、「U」の発声で響きをつかみ、紙が響いた瞬間の口形で声を出すと、強く響く声と歌詞、音色が揃うことを確認できた。 <input type="checkbox"/> 「ワン」や「ヒュー」等、瞬時に声を出して、強い響きを感じてから歌う練習を重ねると曲想表現が豊かになった。 <input type="checkbox"/> 鼻の響きが足りないとき「ミンミン」の発音で鼻腔に響きを当てると、鼻によく響く声と柔らかない声が出ることが分かった。

化因子を素早く与え、その強化因子を確実に行動に随伴させるという意味である。言い換えれば、通常、慣れ親しんだ中性刺激の他に、もう一つ刺激を強める強化因子を対にして与えると、より強い情動が喚起される、という考え方である。つまり、対として与えられた新たな刺激は、更なる行動を誘起させ、進行中の行動に影響を与える、という意味である。前述した「ボイスマックス唱法」の例を引き合いに出すと、表声で歌っているとき、「裏声」という強化因子を与えたために、刺激が強められ、「喚声区」を除去できた、という喜びから強い情動が喚起され、目的が達成されるのである。オリジナルナックは本時の学習展開の中で常に視聴価ブランドとセットで使用される。オリジナルナックの具体例とその検証事例を表1に提示する。

3. 「視聴価ブランド」とは

(1) 「視聴価ブランド」の定義

「ブランド」とは本来、製品につける名前、ないしは名前がついた製品そのものをいう。だが他方では、これが転じて他と区別できる特徴を持ち、価値の高い製品のことを指すようになった。語源的には焼印から派生した「商標」や「銘柄」のことをブランドというが、本研究が提唱する「視聴価ブランド」のブランドは、「自ら視聴した作品が他者とは異なる価値を呈したときの象徴内容」をブランドと定義している。これは、特にその音は美しいとすることで、暗に他の音との比較を行っていることである。もともとブランドという言葉は、一般的には他社と自社との商品を比べて、どちらが銘柄としての価値が高かったか、これを識別するときなどに使用されている。

しかし、本研究では、「モノ」ではなく、今聴いたり創り上げた音楽は、他にはない素晴らしい音楽であった、と識別するときの感覚的な「象徴内容」のことを「視聴価ブランド」と呼ぶことにしている。正確に言えば音楽活動には、「見る」、「聴く」だけではなく、「歌う」、「奏でる」、「創る」、を加えて5領域が存在する。「視聴」といえば「見る」と「聴く」の領域を限定したかのように受け取られるかも知れないが、ここではそうではなく、「歌う」、「奏でる」、「創る」等の表現活動を含む上記した5領域の音楽活動の全てを集約して「視聴」の用語を使い、「視聴価ブランド」と命名している。言い換えれば、感性的対象としての音や鳴り響いている音楽美について考察するとき、その象徴内容を「視聴価ブランド」と定義している。

一方、芸術の領域に限定した場合、「視聴価ブランド」とは、あるものを見たり聴いたりして、自ら識別したもののうち、他と区別できる特徴を持ち、価値の高い象徴内容（イメージ、または作品）のことを指す。強いブランドとは、個々の学習者の関心領域において、圧倒的な価値的優位を確立しているものであり、またその学習者の期待を常に裏切らないことを約束する芸術作品の象徴内容のことをいう。

（２）「視聴価ブランド」を必要とする理由

音楽教科の学習指導案の作成にあたって、わざわざ「視聴価ブランド」の項目設定を提案する理由は、新学習指導要領の各学年の目標の変更にある。つまり、「視聴価ブランドを構築する」とは、「自ら視聴した作品が他者とは異なる価値を呈したときの象徴内容」と定義づけたが、この主張が新学習指導要領〔第1学年及び第2学年〕のA表現（３）ウ（音楽づくり）に、「発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現をするために必要な技能を身に付けること」とあり、これが視聴価ブランドの主張内容と一致するのである。ここでは、更に（ア）と

して「即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能を身に付けること」として、具体的な表現する技能まで求めている。この二つの内容が、「他者と異なる価値をもつ美的な象徴内容を構築する技能」、つまり「視聴価ブランド」を見いだすことがどれだけ重要であるかを述べていると判断したのである。

もう一つの理由は、冒頭のとおりでも触れたが、平素の学習指導案の書き方が、ただ授業の流れを順序立てて書かれてあるだけで終わっているという現実があるということである。そして、「評価規準」や「評価方法」の欄には、「歌えたか」や「リズムが取れたか」などの文言で指示はしているが、その評価方法が、「態度観察」や「演奏聴取」などの点検的な評価方法で終わってしまっているのではないか、という不安である。つまり、どのような評価規準を示し、どのように評価付けをしたのか、学習者の前で実際に確認する必要を強く感じているからである。

ここで大切なことは、聴覚や視覚で判断する音楽活動は、「モノ」だけでその価値を判断するのではなく、「情動を喚起させる直感的な美感覚」も求めているということである。そして、音楽に関わっている学習者が視聴価ブランドを意識するということは、提供者と学習者の間に「情動による感情的な絆」をつくることになる。従って視聴価ブランドを構築するということは、音楽によって「喜びを味わう」だけでなく、「必要な技能を身に付ける」ことの重要性を自覚できる。以上のような見地から、視聴価ブランドを導入することは鋭敏な美感覚を育てることに直結するのである。視聴価ブランドは、本時の学習展開の中で常にオリジナルナックとセットで使用される。

次の表2に具体的な「視聴価ブランド」の例を挙げ、これをどのように構築すればその効果と美意識を獲得できるのか、そのロードマップの一例を提示する。

表2 「視聴価ブランド」を構築するロードマップ（行程表）の一例

活動の要素 （活動領域）	視聴価ブランド名 （視聴価値のある象徴内容）	表現形態 （音楽活動）	キャッチコピー （注意を引く宣伝文）	視聴価ブランドの効果 （情動性身体反応）	獲得する美感覚 （鋭敏な美感覚）
歌う （表現）	換声区の消失	斉唱 重唱 合唱	他者と溶け合う声が価値を呼ぶ	表声と裏声の融合による換声区の消失 （協調的満足感）	達成感
奏でる （表現）	テンポの揺らぎ効果	独奏 重奏 合奏	妥協なき演奏に宿る音楽美	音積が生み出す「期待」と「不一致」の解決 （こぼれる笑み）	有能感
創る（踊る） （創作）	音楽的期待のシステム （注4）	リズムあそび 旋律創作 即興（身体）表現	好奇心旺盛な人に付く創造力	規則性に対する暗黙の期待を裏切る効果 （自信ある歓喜の表情）	安定感
聴く （鑑賞）	協和・不協和の心的解放	音楽鑑賞 DVDの視聴 成果発表演奏	沈黙して聴き入る人に咲く音の花	心的結合を生み出す緊張から開放への進行 （緊張からの解放感）	安堵感

4. 本研究の新学習指導要領での位置づけ

本研究のテーマに掲げた「鋭敏な美感覚を育てる」、「オリジナルナックの開発」、「視聴価ブランドの構築」が、新学習指導要領のどの部分に位置づけられているのか、部分的には上述して来たが、ここではまとめてその原文を提示する。

(1) 「鋭敏な美感覚を育てる」ことの位置づけ

「鋭敏な美感覚を育てる」とは、「個性性、意外性を追求し美しさを感じ取る感覚」を育てることを意味する。この主張は次の新学習指導要領の中に位置づけられている。

- ①新学習指導要領の第1目標(2)「音楽を味わって聴くことができるようにする」
- ②新学習指導要領第5・6学年目標1(2)「曲や演奏のよさなどを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする」
- ③新学習指導要領第5・6学年〔共通事項〕(1)ア「聴きとったことと感じとったこととの関わりについて考え

ること。

(2) オリジナルナックを開発することの位置づけ

「オリジナルナック」を開発するとは、「動機付けのための独創的指導技術」を開発することを意味する。この主張は次の新学習指導要領の中に位置づけられている。

- ①新学習指導要領第1目標(1)「表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする」

(3) 「視聴価ブランド」を構築することの位置づけ

「視聴価ブランド」を構築するとは、「他者と異なる価値をもつ美的な象徴内容」を構築することを意味する。この主張は次の新学習指導要領の中に位置づけられている。

- ①新学習指導要領A表現(3)ウ(音楽づくり)「発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現をするために必要な技能を身に付けること」
- ②同(ア)「即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能」を身に付けること。

5. 「オリジナルナック」と「視聴価ブランド」を導入した学習指導案

(1) 学習指導案の作成手順

- ①使用する曲(教材)はどの曲にするか、テキストの中から1曲選択しよう。

教材(曲名)「」第()学年用 テキスト()頁

- ②全配当時間を通して何を重点的に指導したいか新学習指導要領の音楽の要素から3個以上選び○で囲もう。

音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ、(歌詞、言葉の発音、音程、声の響き、曲想等) ()内は自ら設定した音楽の要素

- ③3時間配当とした場合、上記で選んだ音楽の要素をどのように配分するか、各時間最少2個は押さえておこう。

(例) 第1時(旋律・歌詞) 第2時(声の響き・音の重なり) 第3時(和音の響き・曲想)

予定している要素 第1時()() 第2時()()
第3時()()

- ④授業効果を高めるために、機転の力としての「オリジナルナック」(独創的指導技術)をいくつ使うか、まずは事前に一つだけ押さえておこう(複数記入可)。

(例) 第1時(母音唱法) 第2時(アタック唱法) 第3時(対面・背伸び唱法)

予定しているオリジナルナック 第1時() 第2時() 第3時()

- ⑤「視聴価ブランド」の設定

表2を参考にして学習指導案の「本時の展開」に、まとめとしての「視聴価ブランド」の項目を設定しよう。

設定したい視聴価ブランド名→「」

- ⑥「題材名」と「本時の目標」の記入：配布した資料や現在使用中のテキストの中に掲載されている「指導のねらい」や「指導のポイント」を参考にして、配当した3時間分の「題材名」と「本時の目標」を「～しよう」という方向目標を示す形で記入しよう。

題材名→「」 本時の目標→「」

(2) 第6学年音楽科学習指導案（同声二部合唱の展開例）

日時：平成 年 月 日（ ） 第 校時
場所： 立 小学校音楽室
学級：第 学年 組男子 名 女子 名計 名
指導教諭： 先生 印
授業者：教育実習生 印

i. 題材名

「声の重なりを感じながら曲想を生かした合唱をしよう」

ii. 題材設定の理由

本題材は、現小学校学習指導要領音楽：第5・6学年の〈A表現（1）エ〉「各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと」を受け、お互いの歌声を聴きながら、声のバランスのとれた二部合唱をさせることに着目して設定した。これを実現するためには、同指導要領第5・6学年の[共通事項]（1）ア（ア）に示された「音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素」の中から、どの音楽の要素を中心に指導するのか明確にして指導計画を立てることが重要である。それゆえ、指導計画の配当時間の中に割り当てた要素と、本時の学習展開の中に位置づけた要素が一致しているか、しっかりと確認して指導する必要がある。また、授業における合唱活動は、全面的に教師が指導するのではなく、グループ活動を通して、児童が自ら学び、主体的で創造的な音楽活動が展開できるようにその方法を工夫させる。さらに、本題材では、合唱を楽しみながら、その喜びを味わうことをねらっているが、ここでは、自己の任務を全うするだけでなく、他のグループの要求や提案に応じたり、自らの意見や積極的な態度を表明したりすることをも学習させる。それにより、旋律の重なり方と他のパートとのかかわりから、自分の役割を理解して、ともに歌い合わせる喜びを感得できることをねらいとして本題材を設定した。

iii. 題材の目標

- ア. 各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。
- イ. 曲想の変化を感じ取りながら、同声二部合唱の響きを親しむ。
- ウ. 合唱の表現力を身に付けるための独創的な表現技術（オリジナルナック）を開発する。
- エ. 「空を飛ぶ」という願いと、あこがれを大切にして、のびのびと歌わせる。

iv. 指導内容（現学習指導要領の指導事項）

- ア. 音楽科 A表現：第5・6学年の指導内容
 - ・「呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと」〈A表現（1）ウ〉
 - ・「各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと」〈A表現（1）エ〉
- イ. 音楽科 [共通事項]：第5・6学年の指導内容
 - ・「音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素」[共通事項]（1）ア（ア）

v. 使用教材（楽曲）

「翼をください」（同声二部合唱曲） 山上路夫 作詞／村井邦彦 作曲／加賀清孝 編曲

フォークソング全盛の1971年に、グループ「赤い鳥」が歌ってヒットした曲である。変ロ長調、4分の4拍子。斉唱→同声二部の流れと共に次第に響きの厚みを増すように編曲されており、伴奏を含めた和声の響きも変化の多い楽曲であるため、題材の目標達成を促す教材として有効と考える。

vi. 共通事項として扱う「音楽の構成要素」, 指導計画, 観点別評価規準

共通事項として指導する音楽の要素(本時)を指定	・主な指導内容 ・主な学習活動 ◎は本研究の中心課題	ア. 音楽への関心・意欲・態度	イ. 音楽表現の創意工夫	ウ. 音楽表現の技能
第1時 ・ <u>旋律</u> ・ <u>音程</u> ・ <u>リズム</u> ・ <u>強弱</u> * <u>歌詞</u> * 印は学習指導要領に記述のない独自の要素	[主な指導内容] ・発声練習 ・旋律の歌詞唱 ・呼吸・発音の仕方 [主な学習活動] ◎オリジナルナックの開発 ・言葉の意味の理解 ・グループ活動・オリジナルナックの提案 ◎視聴覚ブランドの確認 ・学習帳に記入	① <u>旋律の流れやリズム</u> の変化に興味をもち、楽曲のよさを味わいながら歌おうとしている。 ② <u>歌詞</u> にこめられた気持ちを知り、正しい <u>音程</u> と <u>強弱</u> を生かした表現につながる歌い方をしようとしている。 ③他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かそうとしている。	① <u>旋律の流れやリズム</u> の変化を感じ取って、楽曲のよさを味わいながら歌う工夫をしている。 ② <u>歌詞</u> にこめられた気持ちを知り、正しい <u>音程</u> と <u>強弱</u> を生かした表現につながる歌い方を工夫している。 ③他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	① <u>旋律の流れやリズム</u> の変化を理解して、楽曲のよさを味わいながら歌っている。 ② <u>歌詞</u> にこめられた気持ちを知り、正しい <u>音程</u> と <u>強弱</u> を生かした表現につながる歌い方をしている。 ③他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かして歌っている。
第2時 (本時) ・ <u>リズム</u> ・ <u>音程</u> ・ <u>声の重なり</u> ・ <u>音色</u> * <u>言葉の発音</u>	[主な指導内容] ・発声練習 ・表現の工夫 ・合唱練習 [主な学習活動] ・グループ活動 ◎オリジナルナックの開発 ・二部合唱 ・学習帳に記入 ◎視聴覚ブランドの確認	④互いの歌声を聴きながら、 <u>リズム</u> や <u>音程</u> 、 <u>音色</u> 、 <u>言葉の発音</u> の仕方に気を付けて、声を合わせて歌おうとしている。 ⑤パートの役割を意識しながら、 <u>声の重なり</u> を感じて、それを生かした音楽表現に取り組もうとしている。 ⑥他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かそうとしている。	④互いの歌声を聴きながら、 <u>リズム</u> や <u>音程</u> 、 <u>音色</u> 、 <u>言葉の発音</u> の仕方に気を付けて、声を合わせて歌う工夫をしている。 ⑤パートの役割を意識しながら、 <u>声の重なり</u> を感じて、それを生かした音楽表現を工夫している。 ⑥他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	④互いの歌声を聴きながら、 <u>リズム</u> や <u>音程</u> 、 <u>音色</u> 、 <u>言葉の発音</u> の仕方に気を付けて、声を合わせて歌っている。 ⑤パートの役割を理解して、 <u>声の重なり</u> を感じて、それを生かした音楽表現をしている。 ⑥他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かして歌っている。
第3時 ・ <u>声の重なり</u> ・ <u>強弱</u> ・ <u>速度</u> * <u>曲想</u>	[主な指導内容] ・発声練習 ・伴奏聴唱 ・合唱練習 [主な学習活動] ・グループ活動 ◎オリジナルナックの開発 ・オリジナルナックの実践 ・二部合唱 ◎視聴覚ブランドの確認 ・学習帳に記入	⑦ <u>声の重なり</u> によって生み出される3度の響きを感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現しようとしている。 ⑧前半と後半の <u>曲想</u> の違いを考えながら、それぞれ滑らかな感じと弾んだ感じを生かして表現しようとしている。 ⑨他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かそうとしている。	⑦ <u>声の重なり</u> によって生み出される3度の響きを感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現を工夫している。 ⑧前半と後半の <u>曲想</u> の違いを考えながら、それぞれ滑らかな感じと弾んだ感じを表現に生かす工夫をしている。 ⑨他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	⑦ <u>声の重なり</u> によって生み出される3度の響きを感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現をしている。 ⑧前半と後半の <u>曲想</u> の違いを考えながら、それぞれ滑らかな感じと弾んだ感じを表現に生かしている。 ⑨他者の考えを受け入れ、自分たちの表現に生かして歌っている。

vii. 本時の目標

「互いの歌声を聴きながら、声の重なりを感じて二部合唱をしよう」

viii. 本時の学習指導の展開（全3時間扱い・第2時）〔下線（一）は、配当時間の本時（第2時）で示した音楽の要素〕

指導内容	○学 習 活 動	□教 師 の 働 き かけ	■評価規準・〔評価方法〕 (アー⑥等の表記はviで示した観点別評価規準の記号・番号を表す)
ア. 発声練習	○息を十分に吸って、ゆっくりと発声練習をする。(マ行上行・下行音階)	□足の開き方, お腹の支え等について指示し, 複式呼吸を意識させる。 □背筋を伸ばし, 十分に呼吸させ, 呼気の支えを確認させる。	■腰の周りの筋肉を呼吸のために自由に使えているか。 〔表情観察〕アー⑥
イ. 目標の確認	○本時の目標を確認する。 <div>互いの歌声を聴きながら、声の重なりを感じて二部合唱をしよう</div>		
ウ. 教材曲の鑑賞	○「翼をください」の範唱CDを聴き, 合唱部分についてパートの役割を考える。	□主旋律か和音をつくる音かを判断するヒントを与える。	■主旋律, 和音をつくる音など, パートの役割を言えたか。 〔挙手観察〕ウー⑤
エ. 「オリジナルナック」の開発	○パート別に分かれ, パートリーダーを中心に練習する。 ①リズムに気を付けて歌う。 〈ハンドクラッピング唱法〉 (表1ーコ参照)	□提示した課題が正しくできるように巡視する。 □リズム打ちを通して, タイヤシンコペーション, 三連符等の正しいリズムを体得させる。	■リズムが正しく取れたか。 〔演奏聴取〕ウー④
(本時ではくゝで示したオリジナルナックの中から2～3個選択して使用する)	②表声と裏声の境目が発声的に目立たない歌い方工夫する。 〈ボイスミックス唱法〉 (表1ーエ参照)	□表声と裏声の違いや表声と裏声の変わり目(喚声区)を無くする方法の手法を見せながら, どうしたらお互いの声が溶け合うようになるのか理解させる。(表1)	■個々の声が音色的に飛び出して歌っていないか。 〔演奏聴取〕ウー④
オ. 合唱練習	③各声部を正しい音程で歌う。 〈アタック唱法〉(表1ーイ参照) ④音の重なりを感じながら二部合唱をする。 〈背伸び唱法〉(表1ーク参照) ⑤言葉の発音 〈母音唱法〉 ○上記①～⑤を正しく歌うための「オリジナルナック」(独創的指導技術)を考え, それを導入して歌ってみる。 ○皆で考えたオリジナルナックを基に全員で合唱をする。 ○声の重なりと音色, リズムが不安定な部分を指摘し合う。	□呼吸や声の響きに気を付けて正しい音程で歌えるよう助言する。 □二つの声部を聴き合いながら歌うように注意を喚起する。 □特に言葉の始まりをはっきり発音するように指示する。 □課題意識をもって独自の考えを提案するように指示する。 □個々の感想や意見を大切にするように配慮する。 □旋律の流れに乗ってリズム, 声の重なりを正確に取らせる。 □練習の成果を学習帳に記入させ, 次時の学習に活かせるようにアドバイスする。	■音程が正しく取れたか。 〔演奏聴取〕ウー② ■声の重なりが正しく取れたか。 〔演奏聴取〕ウー⑤ ■正しい言葉の発音で歌えたか。 〔演奏聴取〕ウー④ ■他者の意見を受け入れて練習に参加しているか。 〔発表観察〕アー⑥ ■人の考えを受け入れ, オリジナルナックが生かされた合唱になっているか。 〔演奏聴取〕イー⑥ 〔身体反応観察〕ウー⑥
カ. 視聴価ブランドの確認	○表声と裏声を融合して, 喚声区を無くした二部合唱をする。 〈喚声区の消失〉に気付いて音色の揃った合唱をする。	□パートごとに, また, 合唱として全体の音色が揃うと, 音の重なりも音程的に美しく響くことを注視させる。	■低音と高音の境目が目立たなくなり, 他者とは異なる音色の融合が見られたか。 〔演奏聴取〕ウー④
キ. 次時の予告	○次時は, 和声の響きについてパートごとに話し合い, 共通理解したことを各自の楽譜に書き入れることを伝える。	□声の重なりと和声の響きの違いについて簡単に説明する。	

さい いる } この おおぞらにー つば
 さを ひろげー とん で ゆき た い よ ー かな
 しみのないー にゆ うなぞらへー つば さ はため か せ ゆきた
 1. 1. 2. 2. *rit.*
 い い
 1. 1. 2. 2. *rit.*
 い い

(4)「鋭敏な美感覚を育てる小学校音楽科学習指導案」を作成するためには、ただ授業の流れを順序立てて書き並べるのではなく、「本時の学習指導の展開」の「指導内容」の欄に、表現の工夫としての「視聴価ブランドの確認」の項目を書き入れ、それぞれの学習活動を明記する。この2項目を追記することによって、「鋭敏な美感覚」を育てる目的が一層明確になる(Ⅳ-5-(2)-Ⅷ参照)。

子どもたちがグループ活動を通してオリジナルナックを考案し、その方法を確認しながら評価のことまで考える授業を進めれば、冒頭の要旨で指摘した①子どもたちがどのような学習態度で取り組んで欲しいのか②子どもたちに考える場をどのような形で与えるのか③その結果がどうであったかをどのような方法で評価させるのか、の3点の回答を引き出せるものと確信する。

「鋭敏な美感覚」を育てる場合、「美の価値判断」をどう決定するかという基準については、脳科学的な側面や音響学的見地、また、音楽的情動の誘発度との関係も関わらせて今後の研究課題としたい。

注・引用文献

(注1) 平成27年12月21日に出席した中央教育審議会の答申中の「2. これからの時代の教員に求められる資質・能力」P.9から引用

(注2) 「刺激のペア理論」(B.B.レイヒ/M.S.ジョンソン『教室で生きる教育心理学』宮原英種監訳 新曜社 1983 P.147を参照

(注3) 田畑八郎「機転の力として機能する音楽的タクト」―実技指導で瞬時に役立つ技法研究―大和大学研究紀要第1巻 2015 P.123 表1から引用(補筆修正)

(注4) 田畑八郎「音楽的情動を誘発するアクティブラーニングの実際」―「音楽的期待のシステム」に基づく音楽的手法の発掘を中心に―大和大学研究紀要第2巻 P.185を参照

(注5) 『小学生の音楽6指導書伴奏編』P.36から引用

参考文献

(1) 藤田晃之他『ひと目でわかる小学校新学習指導要領』―解説付き・新旧対照本 時事通信社 2017

(2) 田畑八郎「機転の力として機能する〈音楽的タクト〉」―実技指導で瞬時に役立つ技法研究―大和大学『研究紀要第1巻』2015

(3) 酒井邦喜『芸術を創る脳』東京大学出版会 2013

(4) 田畑八郎『色彩的伴奏づけの手ほどき』ケイ・エム・ピー2010

(5) 田畑八郎『コードネームと和音記号を発見するための伴奏づけ課題101曲集』ケイ・エム・ピー 2010

(6) 田畑八郎「音楽的情動の喚起要因と喚起手法に関する実践学的研究」―こころの知性(EQ)を育む音楽教育を志向して―兵庫教育大学研究紀要 No.34 2009

(7) 田畑八郎『音楽表現の教育学』(第3版)―音で思考する音楽科教育―ケイ・エム・ピー2007

(8) 杉山勝行・後藤暢子『自分ブランドの作り方』全日出版 2005

(9) 田畑八郎『コードネームと和声法を併用した新・和音伴奏入門』(第9刷) 音楽之友社 1996

(10) *The New GROVE Dictionary of Music and musicians*, Macmillan publishers Limited 1980 Japanese Edition Kodansya Ltd 1994

(11) S.K.ランガー『シンボルの哲学』矢野萬里他訳 岩波現代草書 1960

(12) 渡辺護『音楽美の構造』音楽之友社 1969

(13) Meyer Leonardo Bunce(1918米), *Emotion and Meaning in Music*, Chicago Press, (音楽における情動と意味) 1956

